

# 人間物語

## 「私はウイルス」

ところげんすけ

所源亮 著

# 「私はウイルス」

(第41回 八台展出品 2024年5月21日～26日)

「私はウイルス」ということを、人間が、科学的に解明したのは、ごく最近のことである。2003年の「ヒトゲノム」完全解読以降である。

人間は、この解明に、30万年以上の歳月を費した。これがどれほどの大発見か。このことを認識している人は、まず、いない。

人間の基底にあるのは、「真理」とか「叡智」。人間誕生以来、ずっと、このように信じてきた。これが事実でない。となると、今まで積み上げてきた「人間哲学」がひっくり返ってしまう。これは、一大事。

人間の行動の基底にあるのは、「真理」とか「叡智」でなく、事実は「ヒトゲノム」。そして、その「ヒトゲノム」の解読から推定されるのが、「私はウイルス」という仮定。何故なら、その半分以上にウイルスの足跡が内在化(共生)していることが認められるから。

ウイルスは、細胞に侵入して、そのエネルギー機構を乗っ取って、細胞を破壊して、「自己複製」という「生命目的」を実現する。そして、それを伝えるために生まれた。それがウイルスの「生命目的」。

「私はウイルス」。これが事実となると、「ウイルス=人間」及び「細胞=地球」になる。ウイルスの「生命目的」は、結果的に、「自己複製」のために細胞破壊すること。人間の「生命目的」は、「自己複製」のために地球破壊することとなる。細胞が無限にあるように、宇宙には、地球のような惑星も無限にある。

人間が、「私はウイルス」を、素直に受け入れることはまずない。受け入れないよう必死に努める。滅亡するその日まで。しかし、人間は人間の行動の基底にある、「ヒトゲノム」に逆らうことはできない。「生命目的」=「自己複製」という単純な事実を見ないように、美辞麗句の「言語」にひたり、自分を騙して生きる。これが「人間パラドックス」である。

十牛図の八図(人牛悞忘、じんぎゅうぐぼう)の「真理」の会得を、「私はウイルス」と会得したと解釈する。すると、十図(入鄺垂手、にってんすいしゅ)のように、「真理」(「私はウイルス」)を民に伝えるより、蟄居して沈黙を護った方が、賢いということになる。人間は、「私はウイルス」などと絶対思いたくない。だから、酷い拒否に遭うのが必定。

実は、人間はその誕生から、自立していない可能性がある。人間は、どの神かわからないが、その僕(しもべ)かもしれない。「ヒトゲノム」に潜む秘密か。その解明までは、宇宙の「生命目的」を認めて時間を丁寧に生きるしかない。

2024年4月13日(rev2024.4.15/10)

所源亮

# 人間物語

成城大学講義 2024.1.18 (rev31)

今日は、「人間物語」という少し風変わりな講義をするつもりでやってきました。経済学、哲学、社会学、宗教学、考古学、歴史学、宇宙物理学、天文学、分子生物学のいずれでもなく「人間物語」について語ります。しかし、当然のことですが、これらの学問の知識があった方が、今日の講義は、はるかに理解しやすいと思います。ついでにいいますと、パンスペルミア説、ウイルス進化論、ウイルス二元論(LeとLu)、ヒトゲノム内在レトロウイルス、メソポタミア史、生命目的、「近代西洋哲学」の起点と「人間哲学」など従来の視点と異なる考え方を紹介致しますので、先程配布しました今日の講義の補

足資料を後日読んでいただき、この講義の理解に役立てていただければ幸いです。

人間とは、ホモ・サピエンスのことです。その誕生から滅亡までの物語が「人間物語」です。今日は、時間の都合で「先史時代」を飛ばして、「有史時代」にしばって話します。「有史時代」は、15000年前位から現在までの、ある程度確実な人間の足跡が確認できる時代のことです。「人間物語」を100ページの本に喩えると、「有史時代」は、最後の数ページに過ぎません。「人間物語」に最終章があるということは、「人間の誕生」は当然のこととして「人間の滅亡(死)」があるということです。これは人間にとって耐えられないことです。個人の死ほど確実なことはありませんが、人は「不死」を幻想し、確実に公平に訪れる自分の死という現実をなかなか直視しません。それと同じことです。「人間の滅亡」の悲劇は、いくら説得力のある科学をもって説明しても、容易に受け入れられるものではありません。今

日この教室にいるみなさまも含めて、人間はあらゆる努力を「人間の滅亡」論の否定に向けます。そして、その事実が否定できなくなると、最後は、人間の「叡智」に「希望」を求めます。「神」に救いを求めます。この思考は、特に、「西洋哲学」の伝統ですから欧米に顕著な考えです。欧米人の多くは、人間の存在を「不死」の視点(ソクラテスの死=理性の「不死」以来の伝統。永遠の魂)から見ているからです。「東洋哲学」は、この正反対です。人間の存在を死の視点(輪廻転生。生老病死の四苦の中に生きる)から見ています。ですからみなさんは、死の話に拒否反応はあまり示さないであろうと思って、安心して、これから話を進めていきます。

今日は「人間物語」の序章である「人間の誕生」そして生命の誕生(「自然発生説」と「パンスペルミア説」)について語る時間がありません。したがって、ただ一言、人間はウイルス(人間の行動を規定するヒトゲノムに占めるウイルス由来ゲノムが多い)で

あるという仮定が今日の話の根底にあることを認識していただければいいと思います。さて、「人間の誕生」を語る前にそれに先行する「生命の誕生」を語る必要があります。その為に、パンスペルミア説(宇宙空間には生命が溢れている。パスツールの、*Omne vivum ex vivo*、生命は生命から生まれる)が説明されなくてはなりません。この理解には、膨大な知識と素直な科学心が要求されます。幸い 2018 年 10 月に成城大学で「パンスペルミア説」の講義をしていますので、その時の講義概要を今日配布いたします。後で読んでください。人生観が変わると思います。生命は、宇宙に溢れ、地球生命の起源は宇宙にあることは、20 世紀の後半、サー・フレッド・ホイルとチャンドラ・ウイックラマシンゲによって証明されました。ギリシャの哲学者のアリストテレスが、約 2400 年前に提唱した「自然発生説」をまだ捨てきれない学者がいますが、パスツールの白鳥のフラスコ実験以来、何度も否定され

ています。詳細は、提示した参考文献にありますから、後で読んで下さい。

「人間物語」の「有史時代」を決定しているのは、基本的に、地球の自然現象です。260 万年前から続く第 4 紀氷河時代の中の温暖な間氷期 (BC14500 年のベーリングアレレード期)がそのはじまりです。その前は、7 万年前から最終氷期と言われる寒いベルム氷期という寒冷期が続いていました。BC14500 年の突然の温暖化、そして BC13000 年の再寒冷化(ヤングアドリアス期)と BC11500 年の再温暖化への転換は、彗星 X 破片集団ミサイル攻撃(衝突)によるという仮説 (Nature Vol.282, November 29, 1979.W.M.ネピエと V.M.クリューブ)がもっとも有力です。彗星 X 破片集団と地球軌道は、約 1500 年の周期で遭遇してきたと考えられています。この 1500 年ごとの地球の異常事象は、地層学・年輪学の観測とも比較的良好一致しているの

で、地球上の社会的イベントの歴史マップを作成する上で有望な客観的な「科学定規」となります。

これにしたがって、「有史時代」を BC14500 年から 1500 年刻みで時代区分すると、BC14500 年から BC4000 年までは、資料が限られていますので、今後の発見によって大きく変わる可能性があります。BC13000 年～11500 年の再寒冷化、BC11500 年の再温暖化による農耕牧畜。BC7000 年のアナトリアとメソポタミア文明の始まり。BC5500 年のメソポタミア、ウバイド朝(青銅)の興隆。これ以降は、まだまだ不明な点(大洪水も含めて)が多いとはいえ、BC4000 年の 4 大文明(メソポタミア:シュメール、エジプト、インダス、中国)の興隆。そして、BC2500 年から始まる、シュメール及びインダス文明の崩壊。その後 (BC2000 年)のミタンニ(鉄)・ヒッタイト・バビロン(アッシリア、カッシート)の興亡という歴史の輪郭が点々とした記録にあります。BC1000 年前後



のギリシャ暗黒時代はまだわからないことが多い時代ですが、ギリシャ文明の興隆(BC700年)から、多くの史実が存在する為、歴史は急に正確、豊富になります。そして、ギリシャ文明、ローマ文明(ヘレニズム文明)と引き継がれ、AD500年の世界的な異常気象(535-536年)に至ります。次の地球軌道との予定交叉は2035年(前後数十年)という予測です。これを「人間物語」の各時代という表にしてあります。

「有史時代」を、前神話時代(BC14500年～BC4000年)、神話時代(BC4000年～BC2500/BC2000年)、人間時代(BC2500/BC2000～現在)に分けると「人間物語」(したがって、「人間哲学」)がとてもわかりやすくなります。それは、「西洋哲学」には、いつも想定される「神」の存在が、それがなんであれ、背景にあるからです。それを神と人間の関係性から、この3時代にしたがって、「神」を整理区分し、先程紹介

した、「人間物語」の各時代代表に含めました。First God(s)、Second Gods、そして、Third Gods という整理区分です。

前神話時代は、西洋も東洋も共通の「神」を、人間は、想像(創造)していたと思います。ここではその「神」を First God(s)と言います。日本でいう「万の神」です。全ての生命とモノに宿っている「神」です。「山川草木悉皆成仏」を信じ、すべてに神がいてと崇めていました。この「万の神」の頂点に仏法でいう「大日如来(盧舎那仏)」のような宇宙と宇宙生命創生の「神」の存在が想定されていたはずで、す。ですから、「神(First God)」とその子の First Gods がそれぞれの自然の存在の中にあると、人間が想像していたのが BC14500 年から BC4000 年の時代という仮定です。

次は、BC4000 年から BC2500 年/BC2000 年の神話時代の「神」です。ここでは、その「神」を

Second Godsと言います。4代文明の国家の統治者は、自らを「神」の託宣を受けたと宣誓しています。いろいろな「神」を設定して、その代理人だから一般の人間とはランクが違うと思わせて人間の管理をした時代です。ですから、本当に実在した「神」なのかどうかは分かりません。何れにせよ、宇宙的な・人間くさい・戦争好きな嫉妬する・強欲な「神」であることは間違いありません。この「神」の解明は、今後の考古学をはじめとする学者が解明することです。

最後は、BC2500年/BC2000年以降(人間が「神」から独立した後)の「神(Third Gods)」です。この「神」は、人間あるいは人間の想像(捏造、創造\*)の「神」です。Second Godsの束縛から離れ、人間は自分で国も法律も倫理も哲学も「神」までも創造(「人間国家」のインフラ準備)しなくてはならなくなりました。「神(Second Gods)」からの「人間

独立宣言」をした時代です。「人間物語」の始まりです。

人間の「神(Third Gods)」の創造は、バラモン教と\*ユダヤ教(BC1500年～BC1300年頃)が先行し、その後BC7世紀からゾロアスター教、仏教、ヒンズー教、ジャイナ教、儒教、道教と続き、\*キリスト教(0)とイスラム教(AD7世紀)がその後に続きました。

「人間独立宣言」後の“人間の人間による人間の為の”国家は、ミタンニ王国から始まった可能性があります。そして、ヒッタイト、「神」の託宣を得て統治していると宣誓するファラオの翳りが見えてきたエジプト、バビロン(アッシリヤ)に対し、ミタンニ王国から、高度な技術(鉄の製錬や馬術など)や「人間国家」の各種インフラストラクチャーが移転された可能性が、最近の考古学の発見から、示唆されています。この時代、各地各国で「人間国家」。のイン

フラストラクチャーの整備(その一例のハンムラビ法典)が始まっています。

「人間哲学」の主流となり、現代の世界を支配する、「近代西洋哲学」は、BC8 世紀からギリシャで始まりました。その起点は、ギリシャ時代のヘシオドスとホメーロス(BC8 世紀)から始まり、ソクラテス、プラトン、アリストテレス(BC5 世紀)へと受け継がれ、ローマ(「ヘレニズム文明」)を経て、ユダヤ教を起点とする「ヘブライ文明」と合体しました。それが「近代西洋哲学」の父といわれるデカルトに先行する哲学です。そして、デカルト、カント、ヘーゲルの“理性”、ショウペンハウエル、ニーチェの“意志”、ハイデッガーの“実存”へと「近代西洋哲学」は発展しました。これが、「神(Second Gods)」から「人間独立宣言」して人間が独自に作った How to live 指針(哲学)の歴史です。ショウペンハウエルは、人間が「神」を造ったといいましたが、その通りです。この「神」つまり Third Gods は、人間の

creation です。ニーチェは、「神」は、死んだとい  
いました。この「神」も Third Gods のことだと思  
います。「神(Second Gods)」から人間は「人間  
独立宣言」した。その時につくられた「神(Third  
Gods)」は科学に代わった、と。そして「近代西洋  
哲学」は、一層、人間中心主義と地球中心主義を  
押し進めた。「近代西洋哲学」の致命的な欠点は、  
それが「自然支配(自然の征服)」を大っぴらに肯定  
していることです。同じ「神(First Gods)」から出  
発した「東洋哲学」は違います。「神(Second  
Gods)」の影響を受けず、自然の中に生きるという  
「自然共生」の哲学を根底に持ち続け「神(Third  
Gods)」を創り上げました。その意味で、日本の縄  
文時代は、世界でも独自の存在です。それは、「神  
(First Gods)」を一貫して 13000 年以上最後まで  
貫いたからです。

さて、科学の事実は、「人間の滅亡」を示していま  
す。彗星 X 破片集団ミサイル衝突は、原子力発電

所が存在し稼働する地球は、今まで経験したことのない、「人間の滅亡」の危険をはらんでいます。原子力発電所を一年稼働すると広島原爆約 1000 発分の放射能を有する「使用済み核燃料」が産出(10 の 20 乗ベクレル)されます。その「使用済み核燃料」が無防備に地上に貯蔵されています。そこに彗星などの天体が衝突するという事象は、当たり前ですが、地球史上初めてのことです。もちろん、今も昔も、そのようなことは全く想定されていません。しかし天空からの彗星あるいは隕石の衝突は、極めて可能性の高い事象です。最近では、1908 年のツングースカ大爆発(ロシア)と 2013 年のチャリビンスク隕石落下(ロシア)があります。衝突する物体の大きさにもよりますが、落下地点より 100~500km は壊滅的な被害が及ぶと考えるべきです。この様な天体の落下衝突があれば、広範囲に、無慈悲に、放射能は拡散します。

今日は、そのような天変地異がなくとも「人間の滅亡」に至る危険な、否定できない現実を一つあげます。それは、人間による「地球環境汚染」です。これは予測などではなく既に存在する事実です。

放射性物質による「地球環境汚染」です。日本人は、不幸なことですが、世界でももっとも放射能汚染に晒された国民です。広島・長崎に対する原爆投下、大気圏核実験による放射性物質降下、第五福竜丸等の被曝、マグロの汚染、「使用済み核燃料」再処理物の投棄、福島第一を含む数々の原発事故などです。今、日本は、2人に1人が癌になるという時代に生きています。これは、いかに日本の「対がん協会」が否定しようとも、原子力時代以前には無かったことです。日本は、福島第一原子力発電所事故時に発令した「原子力緊急事態宣言」を、いまだに解除していません。つまり日本政府は、日本に重大な放射能汚染の危機があることを内外に宣言し、首相権限を強化して、非常事態体



制をしいています。だから 1mSv/年以上の被ばく地に人間は住んではならないという法に反して、福島県では 20mSv/年の土地に住むことを許可しています。これは人殺し政策です。そして、2023年 8 月 23 日に、年間 22 兆ベクレルのトリチウム（半減期 12.32 年、水素に代わってトリチウムが DNA の塩基結合に置き換わると約 12 年後に DNA が破壊される）を海洋投棄すると発表し実行しました。これには、海外から多くの非難が寄せられました。しかし外国の原発稼働国は、日本を非難する立場にありません。日本の 1000 倍を超えるトリチウムの海洋投棄を行っています。日本より酷い海洋投棄です。

何が問題か。世界の原発稼働によって産出された、「使用済み核燃料」の投棄は、それ以外に経済的に処理する方法はありません。したがって、予想されたことですが、このように遠慮なく堂々と、10 の 24 乗ベクレル(原発稼働 10000 回として)を

はるかに超える放射性物質を、10の21乗リッターの水をようする海洋に投棄する時代に突入したことが「人間の滅亡」を決定する大問題、turning point、転換点です。これが「人間の滅亡」をほぼ確実にします。これによって、世界の海水に含まれる放射性物質は、10～20年(予想)以内に、リッター当たり1000ベクレルを超える時代になる現実が到来したということです。この計算等の詳細は、小生著の「原発のミニ知識」に書いてあります。今日配布しますので、後で、勉強して下さい。ちなみにリッター32ベクレルの海水で鮑は死滅するという実験結果を東電が明らかにしています。核種の半減期を考慮しても、食物連鎖の頂点に立つ人間は、数万から数百万倍にも達する生物濃縮によって半減期は相殺されますから、そのような食品を食することによって死にいたりします。

「人間の滅亡」に対して、原爆を使用する核戦争、中学生でもできる遺伝子組み換えキットの販売

や、カルタヘナ議定書(2003年)の形骸化でもはや制御できなくなってしまった遺伝子組み換えの研究と事業推進、目的としない結果が生ずる可能性のあるAIなど、「神」の領域と思える、「人間の滅亡」の要因は多くあります。しかし、「使用済み核燃料」による「地球環境汚染」の方が、現実存在する、圧倒的に大きな不可逆の問題です。

「人間物語」の終章「人間の滅亡」という悲劇を誘導した哲学(思想)の始原は、世界を支配する欧米の哲学である「近代西洋哲学」に違いありません。それは、どのようにして「人間の滅亡」を必然の帰結としたのか。あるいは、哲学(思想)の問題でなく、ヒトゲノムに潜む宿命なのか？ギリシャのデルフォイにあるアポロ神殿(アポロは哲学の神でもある)の入り口には”汝自身を知れ(*Nosce te ipsum*)”と書かれています。”分をわきまえろ”とも書いてあります。「神」の世界に入る前に、「神」から人間に与える重要なメッセージです。この神は

Second Gods です。したがってこれは、一般に理解されているように人間の生き方(自制を求める)を説いているのではなく、ヒトゲノムの真実(ヒトゲノムの大半はウイルス由来)を知れということではないかと思います。

幸か不幸か、COVID-19によって、一般の人にもウイルスの基礎知識が普及しました。ここでは、最小限の知識に限って説明します。ウイルスは、「自己増殖」だけをその「生命目的(「宇宙意志」)」として宇宙空間に存在しています(仮説)。特定の標的細胞に侵入すると、その細胞のエネルギー機構を乗っ取り、細胞を死に至らせ、「自己増殖」を果たし、次の標的細胞に向かいます。ヒトゲノムの半分以上(43%以上)はウイルス由来です。もし、人間とウイルスの「生命目的」が同じであると仮定すると、人間にとって地球は、宇宙空間に無限( $10^{22}$ )に存在する標的細胞(惑星)の一つに過ぎないこととなります。この仮説は、今日の講義の

本題の一つです。その参考資料として、今日「人間哲学」表を準備しました。その中には、多くの大胆な仮説と今までの科学(自然発生説、ダーウィン進化論仮説、地球は宇宙で唯一の例外的な惑星などに疑問を呈する最新の厳密科学(パンスペルミア説、Horizontal Gene Transfer: 遺伝子の水平伝達、ウイルス進化論)も含まれます。これらの入門書として書かれた「生命起源の謎」(いけのり著、松井孝典監修、2018年、地涌社)を後で今日の講義の「人間物語」を検証する時に役立つ資料として配布しました。この詳細は、英文ですが、”Our Cosmic Ancestry in the Skies(Chandra Wickramasinghe, Kamala Wickramasinghe, Gensuke Tokoro 共著、Bear and Company 2019)”に詳しく書かれています。これは大学に置いておきますので、興味のある方は、担当教授にお問い合わせ下さい。

「人間の滅亡」という「人間物語」の哲学の始原とその発展(歴史)と最新の厳密科学が示す事実を理解した上で、みなさんは、どのように生きる(これが「人間哲学」です)ことが最善か、それを、自ら悩んで苦しんで考えて欲しいと思います。

先程説明した通り、「近代西洋哲学」は、その根底に、人間は、「自然の征服」を徹底的にするという人間中心主義・地球中心主義を持っています。科学は、「自然の征服」のためにあるという考えです。この終着点が「人間の滅亡」です。残念ながら、既に、「人間哲学」を「自然の征服」と考えていない「東洋哲学」に変える余裕はありません。放射能による「地球環境汚染」は不可逆の現実です。手遅れです。Are we happy? に対して、厳密科学は人間に No! を突きつけています。それは、放射性物質が化学物質でなく原子そのものであり、その処理は人間の能力と経済を完全に超えているからで

す。繰り返しになりますが、放射性物質による「地球環境汚染」は、既に現実となり、修正も後戻りもできません。「地球環境汚染」は人間の生命維持限界を超えました。この悲劇の結末にあっては、残念ながら、Are you happy? を個人として問うしかありません。ソクラテスが言ったように、「無知の知」は、無知の無知よりましだということです。

「人間哲学」は、宇宙生命論の中で人間がはじめて自分の「言葉」で書いた人間の正しい生き方、how to live の指針です。しかし、その先には、きっと、もっと根源的な人間行動の動機の本元(root motive)があるはずで、人間を含む生命の「生命目的」です。それを「宇宙意志(cosmic will)」と仮定します。これはきっとヒトゲノムに内包されています。ヒトゲノムとは、人間のすべての細胞の中にある核内に収納されている 46 本(父親から 23 本、母親から 23 本)の染色体上に書かれた遺伝コードのことです。G、C、A、T という四つの塩基

(文字)で書かれています。60 億個の塩基(GC あるいは CG と AT あるいは TA の 30 億対)という膨大なものです。ヒトゲノムは、2003 年に完全解読(仮解読は 2001 年)されましたが、配列が分かったというだけで、その意味はほとんど分かっていません。まだ解読できていない一部の古代文字のようです。ただ、約 1.5%はタンパク生成にかかわるものだということは分かっています。驚くべき発見は、ヒトゲノムの約 9%はウイルス(そのものがヒトゲノムに入り込んでいる)であるということです。ウイルスとウイルスの断片と思われるものを含めて、実に、ヒトゲノムの 43%以上を占めています。最近の報告では 70%以上とも言われています。「人間物語」の台本(ヒトゲノム)の多くのページがウイルス関連だとすると、「人間物語」は、「ウイルス物語」に酷似(同じような台本)しているということです。ウイルスはおそらくもっとも生命の根源に近い存在です。食べなくとも何億年でも生きていきます。どこにでも侵入できます。宇宙空間の何処



にでも移動(仮説:彗星に乗って)できます。極限状態でも死にません。食べないから死などそもそもありません。つまり永遠を獲得した生命体です。その「生命目的」は、単純明快、一つです。「自己(DNAかRNA)増殖」だけです。「生命目的」の実践は、「宇宙意志(cosmic will)」によります。

これほど人間とウイルスが、ゲノムレベルで酷似しているのであれば、人間の「生命目的」は、ウイルスの「生命目的」と同じではないかと疑うべきです。BC2500年～BC2000年位に、「人間独立」宣言をしてから今日まで、誰も(ギリシャ哲学者も)この疑問を持っていません。デカルトの“*cogito ergo sum*(我思うゆえに我あり)”は、ここ(Are we not a virus?)に向けられるべきです。デルフィに立つアポロ神殿の“汝自身を知れ”は、ヒトゲノムに内在するウイルスの「宇宙意志」を認識しなさいという、Second Gods「神」の人間に対する、メッセージではないかという新解釈が考えられます。

ギリシャ哲学の「ロゴス」は、論理より「言語」のことです。人間は、突然数万年前に、「言語」能力を獲得しました。人間は、その「言語」を使って不都合な事実(ウイルスと同じ「宇宙意志」を持ち、自己増殖だけが「生命目的」である)を隠蔽したいのではないかと疑いたくなります。

ところで地球は、この広大無辺の宇宙にあって唯一無二の惑星だと信ずる地球中心主義が完全に間違っていたことが分かりました。1995年のM.マイヨールによる系外惑星の発見です。天の川銀河だけでも10の22乗個の系外惑星の存在が推定されています。となると、この宇宙で地球は特別な惑星でなく陳腐な存在です。このような惑星を人間が破壊することは、ウイルスが自己増殖のため、善悪を超えて、標的細胞を次から次へと破壊する行為と酷似しているように思えます。

最後になりましたが、「人間物語」の“人間とは？”について、画家のポールゴーギャンは、19世紀末に、“我々は何処からきたのか、何者か、何処に行くのか”を問い、タヒチにて、それを描きました。現代科学は、それに答えます。“我々は宇宙から来た。我々はウイルスである。我々は宇宙に帰る。”と。厳密科学を直視できなくなった人間は、「人間の滅亡」から目を背け、放射能に埋もれたうすら汚い地球で、「お金」を新たな「神(Third God)」とし、パンドラの壺の「希望」に縋り、生きています。繰り返しになりますが、人間に「叡智」はありません。自分で捏造した「神(Third Gods)」あるいは、その前に存在したかもしれない「神(First Gods あるいは Second Gods)」に救いを求めるしかない小さな存在です。

2024年1月18日  
所源亮

# 1. 「人間物語」

一人間の誕生から滅亡まで

## 2. 「人間物語」各章

序章	パンスペルミア説 先史< 彗星 X 破片集団との遭遇>	(約 50 万年前～BC14,500 年) (BC14,500 年)
1 章	神 (First Gods) と共存	(BC14,500 年～BC4000 年)
2 章	神 (Second Gods) のしもべ	(BC4000 年～BC2500 年)
3 章	神 (Second Gods) からの独 立	(BC2500 年～BC1500 年/1000 年)
終章	神 (Third Gods) の創造、 人間の滅亡。	(BC1500 年/1000 年～2035 年*)

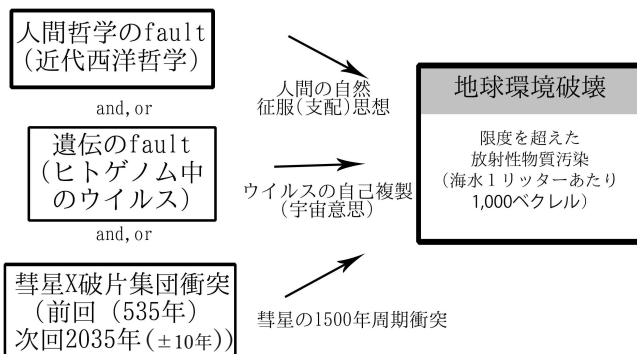
\* 3 の表参照。

### 3. 「人間物語」各時代

—科学的定規（彗星 X 破片集団の衝突、BC14,500 年から 1500 年ごと）による区分。

BC14,500 年	温暖化	ペーリング・アレレード間氷期
BC13,000 年	寒冷化	ヤンガー・ドリラス氷期
BC11,500 年 ～BC6500 年	①人間と First Gods との共生。	農耕牧畜
BC6500 年 ～BC4000 年	②人間が Second Gods に組み込まれていく時代。	農耕牧畜（都市）文明（大洪水？）
BC4000 年 ～BC2500 年	③人間が Second Gods に仕える時代。	4 大文明の興隆
BC2500 年 ～BC1000 年	④人間が Second Gods から独立していく時代。	アッカド、ミタンニ、ヒッタイト、バビロン、アッシリアの興隆
BC1000 年 ～AD500 年	⑤人間が Third Gods を創造して人間システムを作っていく時代。	ギリシア文明、ローマ文明（ヘレニズム） [四] (Third Gods: ①BC14C (ユダヤ教、バラモン教) ②BC6C (ゾロアスター教、仏法、ヒンズー教、ジャイナ教、儒教、道教) ③AD0～6C (キリスト教、イスラム教)
AD500 年 (535 年/536 年)	⑥人間の覇権争いの時代。	天候の大異変（ローマ帝国の崩壊）
2035 年 (±10 年)	⑦人間の滅亡（原発）。	彗星 X 破片集団と地球軌道の遭遇

## 4. 「人間物語」の終章（人間の滅亡）



注釈1：放射線量（ベクレル）の危険レベル

世界の統一基準値はないが、日本の食品規制値（セシウム-137）は100 ベクレル/kg。



注釈2：原発が残した放射性物質

・「使用済み核燃料」の貯蔵総量・・・300,000トン以上

(原発1回稼働10<sup>20</sup>ベクレル/30トン×世界1万回稼働)。

・「使用済み核燃料」の総放射能・・・10<sup>24</sup>ベクレル\*以上。

・「使用済み核燃料」による海水汚染（可能性）・・・1,000ベクレル/リッター。\*\*



注釈 3 : 人間社会のインフラストラクチャー

(国家) : 王制 (人間の王)、法律等 ・ (科学) : 数学、天文学、  
物理学、化学、建築学等 ・ (哲学) ・ (宗教) ・ (文字)

\* 内部被ばく (体の内から放射能を浴びること)。ベクレルはその単

位。外部被ばくは体の外から。単位はシーベルト。

ベクレル→シーベルト換算の簡素計算は、

$$\left( \text{ベクレル} \right) \times 6.5 \times 10^{-5} \text{ (ECRR 係数)}$$

(例) 10万ベクレルは 6.5mSv ( $10^5 \times 6.5 \times 10^{-5}$ ) になる。

\*\* 海水 1,000 ベクレル/リッター中の魚 1kg を食すると、生物濃縮 (1万倍) を経て、ほぼ 100万ベクレルの体内被ばくとなり、65mSv ( $10^6 \times 6.5 \times 10^{-5}$ ) の外部被ばくをしたことと同じになる。

## 5. Innovative Concept

Major Concept	Innovative Concept	Established Concept
生命起源	パンスペルミア説	自然発生説 (否定*)
進化論	ウイルス進化論	ダーウィン進化論 (仮説)
地球	ありふれた惑星 ( $10^{22}$ 個)	唯一の貴重な惑星
ヒトゲノム	ヒト DNA $\equiv$ ウイルス**	ヒト DNA = タンパク質 のドグマ
意思	Cosmic Will (宇宙意思 $\equiv$ ウイルス意思)	<i>Homo sapiens</i> Will (人間 の意思)
地球の定規	彗星 X 破片集団衝突の年代	地質年代
神	神 (3Gods) の定義	神 ( $\infty$ ) の定義なし

\* パスツールの白鳥フラスコ実験、フレッド・ホイルと C・ウィクラマシングの生物 (大腸菌) モデルとの一致と生命誕生の数学モデル ( $1/10^{40000}$  の確率)。

\*\* 機能遺伝子 (1.5%)、HERV と LTR (9%)、LINE (21%)、SINE (13%)、DNA トランスポゾン (3%)、不明 (52.2%)。



## 6. 参考資料

やなぎ出版 地涌社 KADOKAWA	原発のミニ知識 生命起源の謎 スリランカの赤い雨	所源亮著 いけのり著 松井孝典監修 松井孝典著 松井・チャンドラ・ ウィックラマシング対談（所源亮司 会）
恒星社厚生閣	宇宙を旅する生命	チャンドラ・ウィックラマシング 著 松井孝典監修 所源亮訳
恒星社厚生閣	彗星パンスペルミア	チャンドラ・ウィックラマシング 著 松井孝典監修 所源亮訳
Bear & Company	Our Cosmic Ancestry in the Stars	チャンドラ・ウィックラマシ ング、カマラ・ウィックラマシング、 所源亮共著
地涌社	宇宙経済学 (E=M) 入 門	所源亮著
World Scientific	Vindication of Cosmic Biology	チャンドラ・ウィックラマシング 監修の宇宙生命関係論文集（61 編）
早川書房 ASM Press	破壊する創造者 Virus and the Evolution of Life	フランク・ライアン著 Luis P. Villarreal 著
ダイヤモンド社	二十一世紀の資本主義	ロバート・ハイルブローナー著 中村達也・吉田利子訳
講談社 —	哲学の復興 「人間哲学」表	梅原猛 所源亮（2023年7月）

Memo

## 【著者紹介】

### 所 源亮（ところ げんすけ）

#### 経 歴

東京都大田区大森で農林省官僚所秀雄と所やなぎの子として生まれる。父が在アメリカ合衆国日本国大使館に赴任したのに伴い、小学校 3 年からワシントン D.C.(アイゼンハワー政権とケネディー政権)に移り中学校 1 年まで暮らす。1972 年一橋大学経済学部卒業。

1972 年イースタンハイブリード入社。1976 年パイオニア・ハイブリード・インターナショナル社のアジア担当としてフィリピン、タイ、インド子会社の代表となる。1980 年から米パイオニア・ハイブリード・インターナショナル社(現デュポン・パイオニア社)国際部営業本部長兼パイオニア・オーバースーズ・コーポレーション取締役として市場開発を進め、輸出額を大幅に伸ばした。

1982 年に帰国し、ソフトウェア会社等を設立したのち、1986 年 5 社を合併しゲン・コーポレーションを設立し代表取締役社長に就任。1994 年日本バイオリジカルズを設立し、代表取締役社長に就任。2009 年に同社を日本全業工業に売却。2001 年アリジエン製薬を設立し代表取締役社長に就任した。そのコンセプトは、「日本発を世界に」というメッセージを込めていた。

2008 年から 2013 年まで一橋大学イノベーション研究センター特任教授。2014 年東京大学名誉教授の松井孝典、チャンドラ・ウィックラマシングゲ博士とともに一般社団法人 ISPA 設立。サー・フレッド・ホイル博士が提唱したバンスベルミア説などについて研究している。GCAT 株式会社 代表取締役会長、ルフナ大学(スリランカ)客員教授、インド S.M.Sehgal 財団理事、一般社団法人 ISPA(宇宙生命・宇宙経済研究所)理事、前西町インターナショナルスクール理事、前アールパイロジエン株式会社代表取締役社長。

#### 著 書

『宇宙経済学(E=M)入門』(チャンドラ・ウィックラマシングゲと共著)地湧社 2018 年  
『Our COSMIC ANCESTRY in the STARS』(Chandra and Kamala Wickramasinghe と共著)BEAR&COMPANY 2019 年

『原発のミニ知識』地湧社 2019 年

『pocket book オレンジ:文芸(いつの日か、2 人は恋人)』やなぎ出版 2020 年

## 原 案

『YouもMeも宇宙人』(いけのり著、松井孝典監修)地湧社 2018年  
『生命起源の謎』(いけのり著、松井孝典監修)地湧社 2018年  
『pocket book ブルー:科学(天降感染)』やなぎ出版 2020年  
『pocket book ピンク:復刻版(令女界)』やなぎ出版 2020年

## 訳 書

『彗星パンスペルミア』(チャンドラ・ウィックラマシング著、松井孝典監修)恒星社厚生閣 2017年  
『宇宙を旅する生命』(チャンドラ・ウィックラマシング著、松井孝典監修)恒星社厚生閣 2018年

## 鼎談書

『スリランカの赤い雨 生命は宇宙から飛来するか』(p127～)角川学芸出版 2013年

ところげんすけ  
人間物語 所源亮 著

---

2024年1月18日 第一刷発行

2024年4月13日 「私はウイルス」 revised

編集者 いけのり

発行所 やなぎ出版

---